

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成27(2015)年
3月号
通巻535号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成27年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



イヌガシ 奈良市 川端一弘さん撮影(文・4頁)

平成4(1992)年8月2日

大倭を語る — 野草塾での講演より〔2〕

法主 矢追日聖(満80歳)

肉体に打たれた印しるし

私が産まれたのは明治四十四年十二月二十三日で、それから三ヶ月か四ヶ月くわいたった時にね、私の肉体に打たれてる印が出て来たんです。泣いたら胸の板が動いて、それがだんだん漏斗型に窪んでいったから、心臓も圧迫される。

私は長男やったし、お祖母ちゃんから見たら可愛い孫やがな。だから私と同じ頃に産まれた近所の子を借りて来て、二人一緒に寝かしてその子の鼻つまんで泣かしてみたらしい。ところが世間一般の子供は何も起らない。

これも後で聞いてんけれども、うちのお祖母ちゃんが「こんなややこしい片輪みたいな子にしてしもうて」と神さんに対して文句言うたらしい。その時、霊界の人の言うことが面白かったらしいわ。人格神(≡霊界の人、人格霊、肉体を持たない人間)ばかり集まって、「あの子に印を付けたいけれども、どこが一番本人の支障なしになるか?」ということとで協議してんて(笑)。祝詞のりことばにあるみたいに、「神集いに集い議りに議り」ということがあったと言っやな。

「目をガンチ(≡片目)にしても、一対のもん片方なくしたら可哀想や」とか、「足ビッコ引かしたらこれまた可哀想や」「片手なくしてもやつぱり具合悪い」と。それで結論が「胸に印付けよう」ということになった。

それは、大倭の霊界の人たちが長年の

あいだ世間に認めてもらえないで、キユウコ(※音と意味が合う言葉として平凡社『大辞典』に、「久錮」||久しく閉じこもること、という言葉があるが)してると言うねん。それで胸を病んでいるわけだから、それが一番ええやろうということになったらしい。

けれども私、その時まで子供やもん、健康な人を見た時に「なんで俺こないなつてんやろ?」と思いましたが。学校で泳ぎに行つたかて、「おい矢追! 背泳ぎせえよ。お前の胸の所で金魚浮かしたら!」とか言われるんですからね。恥ずかしいことあるし、あんまり見せたくないわいな。

一番悲観したのは小学校六年の時や。県立郡山中学校へ試験の発表見に行つた時に、私は不合格なの。それで私の担任の先生が「あの子が落ちるはずない」と、学校へ調べに行つてくれてん。そしたら、「あれだけ心臓を圧迫されとつたら、ものの三年と命ないやろ」と医者が言うたんで、「せつかく中等学校(※五年間の旧制中学)の教育受けても、どうせ亡くなる子やから、気楽に遊ばしてやった方がええやろ」という話になつたらしい。

そりゃ情けなかつたよ。でもまあ「しょうがないな」と思うてたら、その担任の先生が、「やっぱり可哀想や。三年で死んでもかまへん」と思うてくれてね。親も中等教育受けさせたいと言つてんのやから、何とかそういう学校はないかと、いろいろ探してくれたの。奈良から大阪からずっと。そうしたら大阪の布施に、日新商業という新しく出来た学校がありました。現在も日新という名の学校がありますけれどね。そこは私立の学校で設立者がお医者さんです。それで担任の先生が、「この子は体格ではねられたけれども、一応試験をしてやって、それに通つたら取つてや

てほしい」と頼みに行つてくれたんです。そして締め切り一日前に願書を受け付けてくれて、試験受けたら今度は簡単に入れたんです。

お陰さんで大学まで行かしてもちろて、卒業は二十四歳でしたかね、そうすりゃあ今度は兵役の義務というのがありますが。それで兵隊検査に行つたら軍医が私を見てね、「大学を出ていてもお前みたいなもん、銃持って戦争行つたら、めつたに一年命ないわ。女性と一緒に」と言うんです。さーっと赤で線引かれて、兵役免除。

甲種合格だと言つて皆が威張つて歩く時代にね、兵役免除女性型にしようた。半分は悲観したけど半分は嬉しかったわ。災い転じて福みたいなことになつてんから。兵隊に行くこと命あらへんし、人殺しに行くこといらんしね。

もし私が戦争に行つたら、よう生きて帰つて来ません。あの当時の制度では、大学出てたら大体小隊長か部隊長、いわゆる将校になるんやわな。ほな自分の部下を死なしといて、自分は命あつてもおめおめ帰つて来られへんわ。

私がお腹した時に霊界の人から、「今度は、兵隊に行く必要ない」と言われてたそうや(※今度というのは、伯父・安太郎が兵隊に行つて怪我で除隊して、結局亡くなつてることから。祖母により、安太郎の転生が法主さんだと信じられていた)。そんなこと計算しとつたらしいわ。

だからほんまに兵役免除になつた時には、「やっぱり二、三十年先のこともわかつておつて、神議りに議らはつたんかな」と思うたわ。

私は十七か十八歳くらいから、いろんなもの聞こえて来たり、普通の人が見えないものが見えて来たりしたんです。お祖母ちゃんや母親みたいな気遣いと一緒に住まいしとつて、霊界の話とか飽くほど聞いてんのやから、自分も「ボチボチ気

違ひになつてきたのか」と思うてんけれども、言うてくること聞いとつたら理屈に合うとんのやな。

東京で顕彰運動

昭和十五年の皇紀二千六百年記念の時には、先にもちよつと言つた、うちの大倭神宮の長曾根日子を顕彰して出さなあかんと思つて、初めて東京へ行きましてん。そこで財団法人八紘会というのを私が主宰して、いろんな顕彰運動したんです。

(※八紘||全世界。八紘一宇||世界を一つの家のようにすること。『日本書紀』神武天皇の条の「八紘を掩いて宇にせむこと」により、太平洋戦争期、日本が海外進出する時の標語となつた)

ところが、神武天皇のことを言うのはええねんけれども、長曾根日子の話をしたら「弁士注意!」つて言われてん。「あれは日本の国賊第一号や」とね。それで私もだいたい国賊扱ひされた。まあそんな時代やつたんです。

それでも金鷲が出たのは大倭神宮やったし、そこへ神武天皇がお礼に來られて、日本の歴史で初めて天皇御親祭が行われてんから、「一番重要な場所や」と私は言うんやね(※親祭||天皇が自ら祭の式を執り行うこと)。

そうすると今度は、「矢追日聖というやつが長髓彦(※『日本書紀』ではこの文字)のことを言ひよるの、大倭神宮があるからや。あれを叩き潰せ!」というのが国の方針になつた。それで皇紀二千六百年のその年、鳥居から灯籠から全部撤去されて大倭神宮が潰されてしまつた。県の学務部長と生駒の警察署長が、「神社が行政によって取り壊しを受けたのは、日本でこれが初めてですよ」と言つてた。

ところが済んでしまったらね、一番強硬だった県の何という人やったかな？ 名前忘れたけど、じきに首吊って死んでしまったわ。だからこれ、なかなか有名な事件やってん。

それでも私はまだ八紘会をやったから、確か昭和十八年やったと思う。精神訓話の意味で四人か五人のスタッフで北海道へ行った。石垣さんの産まれたことや、どこやったかな？

(石垣雅設・根室です。)

あ、根室やね。石垣さん何年生まれ？

(石垣・昭和二十一年です。)

ほな、まだ石垣さんの産まれてない時やな。

その根室でね、私の他にも大勢いてはって、それぞれ何か話をしてはんねん。私は皇紀二千六百年の時のこと、蒸し返しの話をしてやろうと思うてたんや。

ところが、大型トラックに乗ってたり海に出てるような感じの屈強な一人か三人ほどが、前にドーンと座って、私がちよっと話し始めたら何かやり出した。そんな人が一人二人と次から次へ場所を移ったりするんで、私の話が出来んようになってしまった。翌日の講習会も、何や知らんけどペシャンコ(中止)になってしまった。まあそんなんで、私の周りに面白いもんが取り巻いておつてん。(※この時のことは、平成25年2・3月号に再録した「大倭千一夜(其の二) 北の国の集団霊動」参照)

顕彰運動をしておった八紘会があった場所は、大久保と新大久保のちょうど中頃、山手線と中央線の真ん中辺りの三階建ての神殿でした。そこには川面凡児という人がおつたんやな。私は川面さんのことよう知らんやけど、偉い人やったらしい。その川面さん亡くなられた後に私が入らんないようになつてしまったのは、何なのか、運

命やわね。

兜を脱ぐ

その頃東京におつた人ならわかるやろうけど、隣組とろぐみというのがあって、棒に藁や縄を巻き付けたみたいなもん、水で濡らしてね、「焼夷弾たいはんの油脂が壁にへばり付いたらこれで叩け」とか、そんな訓練ばかりやってん。

ところが昭和十八年の暮れ、私が神さんに参つておつたらね、胴が真っ黒けな飛行機が密集して出てくんのやな。それで下にビルが見えとるから東京やと思うねんけど、そこへ火の粉みたいなものダアーダアーと落ちて来て、そこら一角全部いっぺんに燃え上がってしまうねん。焼夷弾や。それなのに隣組の訓練なんかは、一個一個落ちたこと想定してやっとなんかからね。

そしてその時に、「日本は戦争に負ける。それによって日本は救われるんや」と、霊界から言うて来たの。それで見とつたら、丸い地球儀が出て来て、世界中の国の全部に日の丸の旗が立ってんねん。ところが「戦争に負ける」と言うのやから、「これ、わしの妄想か？ 気違いかな？」と、思ってたけどもな。

また、「お前は大和へ帰って、死ぬまでするつもりで百姓をせよ」とも言われたから、大和へ帰ることにしてん。

今考えたら惜しかった。百人町の一角の六百坪の敷地を、「金一銭もいらん」と実印を置いて全部ただでやってきてんから。まあ今になって欲出て来とるわ(笑)。

それで十二月の暮れか翌年一月頃帰って来て、牛やら農具やら買うたりしたんです。田んぼは、「銭もないやろう」って、何も保障なしに八反ほ

ど貸してもらえてん。ちようど麦を植える時季やったから、「ああ結構やな」と喜んでおつたけれども、いざ使うてみたら一番出来が悪い田やってん(笑)。

その頃は供出制度というのがあってね、一反歩に対してなんぼという供出の割り当てが来るわな。ところが私とこは半分も出来へん。酷い目には遭うてんけれども、農家組合の人がみんな私の分を供出してくれてん。私はこの地の人間やからね、そういうように人のお世話になつたりして百姓始めてん。

そうすると面白いんですよ。私は百姓の経験が全然ないんですけども、牛に犁うり引かせて仕事しとつたらね、牛が仕事を教えてくれるの(※犁うり土を耕す道具)。ところが私のその牛を、誰か他の人が使おうとしても仕事になれへん。牛も心があんねんからね、デーんと横向いて草食べとんのやな(笑)。その牛がまた私の顔をねぶる(「舐める」)しね、私とどんな因縁になつたのか。

草刈りしてもね、鎌を持った手が勝手に動くんや。だからうちの小作の人が、「だんなさん、あんな草刈りの稽古なさつたんか？」と聞くから、「いや、こんなん勝手に手え動きよるねん」と言うてんけどな。そんなふうには、必要とすることは体を通じて教えてくれる。

けれども金儲けだけは絶対教えてくれへん(笑)。これは方向が違つんやね。ほんで私、金儲けみたいなこと考えたことあれへんねん。

元来、私は唯物主義的人間でね、神さん嫌いで逃げておつてんけど、どれだけ逃げたか駄目なんです。日本が戦争に負けるというの、最初は信じられなかったけど本当やってんから。それで私は、生まれて初めて神さんに対して兜を脱いだんです。(続く) 文責・編集部

大倭会だより

表紙写真について

早春の花イヌガシ

大倭会会長 奈良市 川端 一弘

早春の花と云えばスプリング・エフェメラルとして知られるカタクリなどがあります。このイヌガシは木本でありそうした春の草本とは異なりますが、よく知られているアセビ、シキミとともに3月末ごろに咲く花です。

イヌガシは特に珍しい樹木ではありませんが、奈良の近隣の山々ではなかなかお目にかかれない樹木の一つです。ところが奈良公園ではあちこちに生育しておりごく普通に見られます。それはシカがこの樹木を食べないため長年の間に増えたようです。シカが食べない樹木が繁殖し公園の植生を乱すものはナンキンハゼやナギが知られていますが、イヌガシはそれほど繁殖しないので一般には知られていないようです。しかし一部では植えられたサクラの景観をじゃまするからと伐採もされています。

このクスノキ科の樹木は雌雄異株で写真の花は雌株です。雌株は雄しべの黄色い葯が目立ちまた違った景色をつくります。写真は奈良公園で撮影したものです。まだ人影もまばらな公園で常緑の葉に赤い花を映している光景は、静かなひとときを味わうのには恰好の時間で個人的な思い出もあり好きな花の一つです。

近年まで木々を伐るなどという風潮が蔓延していましたが、日本の自然には人間の影響をうけないものは皆無と云うほど少ないものです。よほどの急峻地や奥山以外は皆無です。春日山原始林でも林学者の本多静六などは「あれは原始林ではない」

と論破しています（原始林ではないと云ったのは本多が始めです）。天然記念物においても昔と異なり指定以前の施業を行うのが保全と理解されるようになりました。

自然は人間の営みとともにあり、電気やガスと便利な近代の文明とともに薪炭利用されなくなつた森も大きく変化してきました。この大倭近隣でも以前は松茸があがるアカマツ林でしたが、今は雑木林に変わっています。アカマツの木を見ることは稀になり木はどんどん枯れています。わずかな数十年という世代で森はすっかり変わってしまいました。このことはほとんど記録に留めずにある現在です。学会においても気にもとめず未分野の世界となつていきます。自然を記録することは難しいことですが、ぜひ皆さんが記録されることを願う次第です。（近畿植物同好会会員）

会員の動き

あじさい会 青山 法義

前回報告させていた
だいてから、2年が経ちました。

この2年間の会員の動きに大きな変化はあまりありませんでした。お名前を見ていて、少しは若返ったのかなと思える部分もあります。けれど、やはり世の中の動向と変わらず、大倭会の高齢化も否めません。

何か行事をしようと

平成27年 大倭会行事のお知らせ

例会 毎月第2日曜日

文化行事

- 第325回 4月19日(日)／斑鳩 藤ノ木古墳
- 第326回 5月17日(日)／交野市 肩野物部社
- 第327回 6月21日(日)／神戸・賀川豊彦記念館と食事会
- 第328回 10月25日(日)・26日(月)／
秋の一泊旅行 (行先未定)

弥栄おどり

継続の可能性を検討中

文化講演会 11月8日(日) 計画中

大倭会へのお誘い 年会費1万円

郵便振替 : 01060-6-31705

話が出た時に、結局、60代〜70代の方のお名前が多く出てきます。こんなことを言ってる私自身もあと2年もせず60代に突入してしまいました。大倭会の趣意書の中にも、大倭会はみんなで楽しい事をする事が目的の一つに書かれています。「大倭」は奈良にあるため、どうしても関西中心の動きになりますが、いろんな地域で会員皆さんが楽しめる催しができ、心の交流につながればと思います。

川端会長からも『若い人たちで何か新しい事業(行事)を考えて』と言っていた聞いています。大倭に縁の出来た人達の集まりです。思いつくアイデアがあればどしどしご意見をお願いいたします。

平成27年3月現在、会員数一四四人

「れびつぼね。」

あと足あと

熊本県水俣市 高倉 草児

世に梅仕事というものが存在しておりますが、めぐる季節の中には「甘夏仕事」などというものもあるわけで、季節ともなれば人は甘夏みかんを丸ごと使って、マーマレードやピールづくりに勤しみます。

熊本県は鹿児島との県境、内海型の穏やかな不知火海に面する水俣市。ここいらの地域で四季を通じて、甘夏のある風景は変化してゆきます。四月に萌えいづる若芽。ポップコーンのような小さく白い花の甘い香りにミツバチが誘われ、羽音を交わす。地に水を貯め、農作業にひと時の休息を与えるのは、梅雨の長雨。体感温度が四〇度をこえる中でいたちごっこのように草を刈り、摘果をしながら玉伸びを案じる夏。南国気候の水俣は秋の到来が遅く、十一月、ようやく涼しい風が吹き始めたかな、と思った頃を境にして、甘夏は黄色く色づきはじめます。そしてちょうどいま原稿を書いているこの時期が作業の佳境で、私たちも収穫・選果・箱詰め・出荷などに追われて右往左往しているところです。じつさい、身を刻むような労苦もありますが、魂のこもったみかんをみなさんにおいしく食べていただいているという充実感の中で、それはうまく相殺されているような気がします。

魂のみかん、と申しました。

かつて水俣病事件の被害にあい、生活の場である海を奪われた患者さんたちと、その現場に入った支援者たちが、ともに生きる糧を模索する中で生まれた甘夏みかんの生産グループ、「**まばる**」。

その事務局である「**ガイアみなまた**」で、私は働いています。甘夏みかんの生産・販売を行い、規格外の果実からはまた、マーマレードをつくります。私の父母（※高倉史朗・敦子さん）を合む先輩たちは、「被害者が加害者にならない」を合い言葉に、できるだけ環境や人間に負荷をかけない農業を心がけて、この仕事に従事してきました。

ある種頑固なその姿勢、歴史の中で培われたその矜持（プライド）を、二代目（事務局）の看板に乗せて次代へとつらぬき通すべく、現在挫折を織りまぜながら奮闘しているところなのです。魂のみかんとは、そういう文脈の上に成り立っています。

ところが農業技術はめまぐるしく流転し、国の政策も、諸外国を相手とする取引もその様相を変えて私たちを驚かせてくれます。技術ひとつをとっても、営業スタイルや流通の便でも、おそらく私たちはすでに一周遅れで後手に回っているのでしょう。矜持という覆いに隠して単純にそれをよしとするわけにはいきません。習うべきものは習い、咀嚼し、自身の血肉としていかねばならない。しかしその中であって、たとえ頑固といわれようとも守り抜かねばならないものがあるのだ、という気概を、父が次の文章で示しました。少し長くなりますが、引用したいと思います。

「デフレよりもインフレの方が扱いやすい。少なくとも日本ではインフレの方が管理しやすい、との考え方がアベノミクスの基本にあると聞いたことがあります。しかし輸出や株式投資に無縁の私たちは、この経済政策から果実を得ている実感は全くありません。でも愚痴は言いますまい。水俣、芦北、御所浦で、しっかりと甘夏を栽培し続けることが、非効率な農業などつぶれればよいとうそぶく政治家たちへの抵抗になるはず。農地が荒れた国土とは何もの

なのでしょう。これから私たちは保守主義者に分類されるのかもしれませんが。まばります。」（まばる企画書・二〇一五年一月発行分より抜粋）

保守主義者に分類されることは是非は置きま。しかし、私たちが果実を得ているのは、目の前にあるこの甘夏の樹からであり、足を二本つけて立っているこの大地からであり、そしてその現実性の範疇を超える何ものからでもありません。

私事ですが半年ほど前に自慢のモヒカンを剃りおとし、坊主となりました。それは本当に大切なものを選び取るのに必要な儀式だった（と自分では思っている）のですが、やはり十年來連れそった友に別れを告げるのはさみしくもあり、しばし手のひらに乗せたモヒカンの残骸を見つめて私は、神妙な気持ちでした。何かを選択するということは、別の何かを捨てるということと裏表一体の関係にあるのだなと、そのときしみじみ感じておりました。そして捨ててしまったものに対しては、往々にして感謝と謝罪の入り混じった妙な気持ちを抱くようでもありました。

「国破れて山河あり」といいます。私たちにとつての山河とは、それはたとえば豊かな実りをはぐくむこの大地でしょうし、また無邪気に外でかけ回る子どもたちのしやぎ声、あるいは日曜の朝、厚焼き卵が上手く焼けたときのあの感じなのかもしれない。坦々とした日常の「ぐるり」にこそ大切なものがあるということを、父母たちの続けてきた「甘夏仕事」が示してくれていました。これを連綿と受け継いでゆくことが私の選択なのですが、同時に、その過程で捨象するものに対して少なからず涙を流し、葛藤し続けるのでしよう。そこに在るのは、決して正解になどたり着き得ない、生身の人間なのでした。

寸 紗

第113回

坂田 洋美さん

お孫さんと



感謝の祈り

「歳をとるほどに感謝の思いが湧いてくるようになった。今は母親の言っていた感謝が足りないという事がよく分かる」

坂田洋美さんは昭和20年3月大阪大空襲の2日後、一面焼け野原の大阪市内の病院で生まれた。「当時は見渡すかぎり田んぼで、はりめぐらされた水路に田舟が行き来していた」という大阪府大東市灰塚で育った。

「両親の結婚10年目に生まれた子やからすぐ可愛がられた」事もあって、滑り台も恐くて「あかんたれ」だったそうだが、小学生になる頃には敏捷で友達と自然の中で思いっきり遊び、家に帰れば母親の内職（布団カバー）を祖母と手伝った。

中学では試験の度に能力別にクラスを変えられるやり方に傷つき、また風邪をこじらせて心身共に弱って

いたが、高校では勉強も面白くなりテニスに励む中で元気をとり戻していった。この頃から始めた生け花は「いつしか心が澄み宇宙と一体になるような感覚が身について、生涯生け花の先生で行こうと思っていた」。

高卒後は保険会社に就職。「今のようにコンピュータもなく書類は全て手作業で清書し、すぐに全国の支店長に配布される。仕事は面白く「会社では随分育てられた」という。

母方の実家も人間関係が複雑で、甘く浮ついた結婚はできないと思っていた22歳の時、同じ会社の浩康さんと結婚。「この人と結婚する」と夢で暗示を受けたそうだ。

まずは四條畷に家を借り長女の幸さんが誕生。次いで新居浜、芦屋、小倉、芦屋、熊本と転勤が続く間に泉さん、啓一郎さんが生まれた。しかし、高度成長期で自然は破壊され夫は連日12時頃まで仕事、子供達は

成績だけで評価されていく。「こんな世の中で子供をどう育てたらいいのかが悩みの種だった」

そんな問いに応えてくれたのが、35歳の時に熊本で出会った有機農業運動「いのちと土を考える会」だ。

入会を期に、農業、食、教育、公害、医、原発、障がい等の活動に取り組まれている方々と出会い「世界と自分の足元が繋がったと同時に啓一郎の喘息がたちまち治った」。また以前からやりたかった俳句、書道も始め「いきいき」としていたという。

41歳の時、大阪に転勤となり両親との同居生活が始まった途端チエルノブイリ事故が起こる。「世に警鐘を鳴らす働きをしなくっちゃ」と思い友人3人で「いのちと食べ物を考える会」を発足させ勉強会を始めると共に大東市の人権問題に関わった。また、大阪府有機農業研究会の事務局を頼まれ、良い悪いを超えて「いろんな大阪の農業の現実を見る勉強もさせてもらった」。

一方、雑誌「80年代」で知った自然農と漢方をされている川口由一さんに出会う事になる。「草も虫も敵とせず共に生きている川口さんの畑そのものが平和やった」。現在も二人の孫を連れて赤目自然農塾に通い漢方の勉強会でも学び続けている。「私のような力の弱い者でも畑

ができる喜び。いのちそのものは育つ力を持っているという事や、朽ちていく過程で見える生きる智慧といのちの継承は、子育てや親を看取る事にも通じると思う。余計な事はせずちよつと手伝ってあげるだけでいい」

平成元年の子供の日、妹の昭代さんが乳癌のため帰幽。「大泣きした。悔しくて」。野草社の石垣雅設さんが法主さんと引き合わせて下さり「心配ない」と言ってくれた。法主さんに会って「信じていなかった霊界の存在を自然に受け入れられるようになった」。一番の親孝行は「両親を法主さんに出会わせ、大倭の旅行にも一緒にいかせてもらったこと」だ。

父親の村田啓三さん、母親のシゲノさんを自宅介護で見送った。啓三さんが病院で息を引き取った朝、長女の幸さんの夢に啓三さんから「みんな仲良くな」と言われたそうだ。

洋美さんはご縁の中で外国や日本の聖地を巡って平和を祈る旅に同行したり、自宅ではご夫婦で里親や保護司等をされてきた。

「これまでの流れのすべてが私を成長させてくれた。困難だが、すごい時代に生かされてもらっていると思う。今は三世代同居の日常生活が修行の日々。これからも流れの中で求められたら祈りをもって答えていきたい」

(聞き手 李草根)

大倭千一夜

(其の十五)

昭和40(1965)年10月23日発行『大倭新聞』第15号より再録

身の毛がよだつ秘話

——徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

法主 矢追 日聖 (満53歳)

私の母のこと

いつか話したと思うがね？ 祖母と母と私、三代にわたって一寸毛色が変わっているということ。母の場合、特に繊細な霊視や霊聴それに霊人との対談といった能力は、私が今日まで経験した霊能霊感者の中ではピカ一だよ。親を褒める馬鹿者と笑われるかも知れないが……。ほかにあるとすればお目にかかりたい。真面目だよ!!

母は宗派には関係のない法華信者である。私から見ると、霊能力を度外視すれば平凡な、世帯もちのよい家庭の主婦で、一にも二にもお家大事、子煩悩で自慢が好き、嘘はつかないが……。といった型の人である。根性は男勝り、ときには困る場合もあるがね。善人だよ。歳かね？ 数えで今年七十九歳かな？ とにかく五黄の亥どし。あの白髪ねえ……。うちものだよ。

今晚は母が扱った面白い話を聞かせよう。

昭和の始め頃であった。伊賀の伊那古(三重県)に地方きつての旧家岩田氏(仮名)があった。この家の主人は、故あって母のもとへ些細なことでも相談に見えていた。丁度その頃、奥様の実家に奇怪なことが続発して一家挙げて恐怖症に悩まされていたのである。

奥様の出里は、関の高林(仮名) といつて、酒造会社と郵便局を営んでいた。もとの邸の中に「津島さん」という邸内社があったのだが、神

社の合併が行われた時、この社は或る神社に合祀したらしい。高林氏はこの神社の跡へ郵便局を設置したというわけだ。ところが何の因果か、局の便所が本殿のあった位置に造られるという寸法になった。これから世にも不思議な物語がこの家に出はじめたのである。

岩田氏から悪因縁の解消を依頼された母は、因つてくる妖霊の怨讐を浄化してから、鎮めた御霊箱をかかえ、彼の奥様の案内で関の高林宅へ出向いたのである。その一族の方々には紋服装で、駅頭に勢揃いして迎えてくれたのはいささか面喰らったようだ。母は軽い気持で常着を着て行ったためにねえ……。このただならぬ雰囲気には、次のような身の毛もよだつ秘話が含まれていたのだよ。というのね……。

白い蛇

神社跡へ郵便局を造って間もなく、小さい白い蛇がでた。小指ほどの細い一寸足らずのもので、それを最初に見た者が得体の分からない熱を出して間もなく死んでしまった。このやっかいな白蛇が忘れた頃に姿を現わす。これが出ると必ず誰かが死んだり、家の中に災難事故が起こったり、大きな損害を蒙るとか、ろくでもないことが起こるので、家の人も使用人もその日その日が恐怖の連続であった。

そんな或る日のこと、静々とお姿を現わしたの

である。待つてましたとばかりに、科学信奉者の若き集配人が「馬鹿な、迷信だ」と大声にて呼ばわり、勇猛果敢にも迷信打破へと突進した。そこまではよかった。この青年は小さき白蛇を無情にもつまんで汽車で遠くへ捨てに行った。

ところがだ!! 本人が帰宅していないのに、奥座敷の床の間正面に飾ってある置物の上に「とぐろ」を巻いて坐っていたのには、唾然として腰も抜かさばかりの驚き。

よく見るとその白蛇の頂に、家紋と同じ模様があるのには二度びっくり。

主人夫妻は直ぐに紋服に威儀を正し、自家製特級酒をおもむろに御前へ供えて額づき、両手を合せてお詫びした。「どんな仰せにもしたがい申しますから、どうか今後は姿だけは見せないようにお願い致します」

意気揚々と凱旋したはずの若き勇者も、この妖霊の前にはもろくも姿を消さなければならなかった。捨てた日から数日にして急死したのである。哀れ高林家の運命は、この妖霊にかかっていたのである。

伝統を誇る一家の興亡といった、限られた状況の中に追い詰められた彼等にとつては、私の母に絶る以外に何の打つ手もなかったのである。地獄の中で仏に会い、暗闇に光明を見出した思いで出迎えた彼らの喜びは察するに余りある。

高林家の広き庭園の一角に地祀りしてからは白蛇の姿は見えなくなった。

今は高林家とは疎遠になっているが、関の地に鎮まっているこの龍神霊は、大倭の一隅にその座を持ちつつも、高林家の守護霊として、今もなお鎮まった時の約束を遂行しつつある筈である。

妖霊は自力で浄霊することは難しい。現界人の霊格者によらねば……。

あじさい日誌

第325回大倭会文化行事
斑鳩の里に国史跡 藤ノ木古墳を訪ねる
 ～奈良文化財研究所の金宇大さんと歩く～

日にち：平成 27 年4月 19 日(日) 雨天決行
 集合：奈良交通「法隆寺門前」バス停10時40分
 交通：JR奈良駅発大和路快速大阪行き10時1分発乗車、法隆寺駅10時12分着下車。
 南口より10時21分発「法隆寺門前」行バス乗車、終点下車。
 (車で来られる方) 駐車は法隆寺センターへ(有料)
 ルート：法隆寺南大門前より西へ5分歩くと6世紀後半の円墳に至り、金さんのお話を伺います。近くの斑鳩文化センターへ移動し、副葬品のレプリカや映像を見学。昼食は法隆寺門前でお店を探しましょう。
 問合せ：湯浅芳郎 090-6987-5847
 当日 090-9041-8634
 ※金宇大さん：「おおやまと」の昨年3月号

2月13日 バレンタインデー前日、昇ちゃんチョコをたくさんもらいましたが、例年より喜び方が控えめ。最近、よくチョコレートドリンクを飲んでます。
 2月15日 大倭神宮月次祭。
 2月21日 午後、交流の家でF IWC定例委員会。
 2月23日 午後1時20分から大倭神宮で申孝祭、続いて2時から大本宮拝殿において月次祭が行われました。この日は平成2年12月23日の日聖祭の映像で法話をお聞きしました。(平成3年3月号『おおやまと』で「宿命について・美津留気について」(菅原園))
 2月14日 バレンタインデーでホットケーキにチョコをトッピングする等の創作活動。

「二度目の韓国留学で感じたこと」参照

「だま」として掲載分)
 3月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で巨倭の会。四代目音丸こと池田弘美さんが帰幽されました。享年61歳。先代に続き弥栄おどりでお世話になった方で、告別式(8日)に反保隆臣・青山法義さんがお参りしました。
 3月8日 大倭会主催第554回祇会。近頃の祇会のあり方と本来の祇の意味を考えてみませんかとの提案があり、思い思いの意見を語り合いました。大倭安宿苑では(菅原園)
 2月20日 定例懇談会。新入居者が103歳との自己紹介！(八重垣園)
 (俳句)「用水の流れに添いて犬ふぐり」(短歌)「顧みるわが道程や ふと過ぎる父母の佛壇飾り」

て)として掲載分)
 3月3日 ひな祭り。住死者が職員扮するお内裏様やお雛様と一緒に写真撮影を行いました。(長曾根寮)
 2月3日 (デイ) 節分。豆を箸で運ぶ、職員の顔を鬼にしたピンに新聞紙の玉を投げて倒す等のゲームを競いました。
 2月28日 (特養) 喫茶クラブあじさい。お茶の後、歌に合わせて指の体操や鳴子踊り。(茂毛路園)
 2月20日 定例懇談会。新入居者が103歳との自己紹介！(八重垣園)
 (俳句)「用水の流れに添いて犬ふぐり」(短歌)「顧みるわが道程や ふと過ぎる父母の佛壇飾り」

「だま」として掲載分)
 3月3日 ひな祭り。住死者が職員扮するお内裏様やお雛様と一緒に写真撮影を行いました。(長曾根寮)
 2月3日 (デイ) 節分。豆を箸で運ぶ、職員の顔を鬼にしたピンに新聞紙の玉を投げて倒す等のゲームを競いました。
 2月28日 (特養) 喫茶クラブあじさい。お茶の後、歌に合わせて指の体操や鳴子踊り。(茂毛路園)
 2月20日 定例懇談会。新入居者が103歳との自己紹介！(八重垣園)
 (俳句)「用水の流れに添いて犬ふぐり」(短歌)「顧みるわが道程や ふと過ぎる父母の佛壇飾り」

「だま」として掲載分)
 3月3日 ひな祭り。住死者が職員扮するお内裏様やお雛様と一緒に写真撮影を行いました。(長曾根寮)
 2月3日 (デイ) 節分。豆を箸で運ぶ、職員の顔を鬼にしたピンに新聞紙の玉を投げて倒す等のゲームを競いました。
 2月28日 (特養) 喫茶クラブあじさい。お茶の後、歌に合わせて指の体操や鳴子踊り。(茂毛路園)
 2月20日 定例懇談会。新入居者が103歳との自己紹介！(八重垣園)
 (俳句)「用水の流れに添いて犬ふぐり」(短歌)「顧みるわが道程や ふと過ぎる父母の佛壇飾り」

「だま」として掲載分)
 3月3日 ひな祭り。住死者が職員扮するお内裏様やお雛様と一緒に写真撮影を行いました。(長曾根寮)
 2月3日 (デイ) 節分。豆を箸で運ぶ、職員の顔を鬼にしたピンに新聞紙の玉を投げて倒す等のゲームを競いました。
 2月28日 (特養) 喫茶クラブあじさい。お茶の後、歌に合わせて指の体操や鳴子踊り。(茂毛路園)
 2月20日 定例懇談会。新入居者が103歳との自己紹介！(八重垣園)
 (俳句)「用水の流れに添いて犬ふぐり」(短歌)「顧みるわが道程や ふと過ぎる父母の佛壇飾り」

「だま」として掲載分)
 3月3日 ひな祭り。住死者が職員扮するお内裏様やお雛様と一緒に写真撮影を行いました。(長曾根寮)
 2月3日 (デイ) 節分。豆を箸で運ぶ、職員の顔を鬼にしたピンに新聞紙の玉を投げて倒す等のゲームを競いました。
 2月28日 (特養) 喫茶クラブあじさい。お茶の後、歌に合わせて指の体操や鳴子踊り。(茂毛路園)
 2月20日 定例懇談会。新入居者が103歳との自己紹介！(八重垣園)
 (俳句)「用水の流れに添いて犬ふぐり」(短歌)「顧みるわが道程や ふと過ぎる父母の佛壇飾り」

「だま」として掲載分)
 3月3日 ひな祭り。住死者が職員扮するお内裏様やお雛様と一緒に写真撮影を行いました。(長曾根寮)
 2月3日 (デイ) 節分。豆を箸で運ぶ、職員の顔を鬼にしたピンに新聞紙の玉を投げて倒す等のゲームを競いました。
 2月28日 (特養) 喫茶クラブあじさい。お茶の後、歌に合わせて指の体操や鳴子踊り。(茂毛路園)
 2月20日 定例懇談会。新入居者が103歳との自己紹介！(八重垣園)
 (俳句)「用水の流れに添いて犬ふぐり」(短歌)「顧みるわが道程や ふと過ぎる父母の佛壇飾り」